錦織監督 映画の現場から

●○●7

己の如く人を愛せよ

時流に流されない作品を

3月11日、東北地方を中心にした東日本大震災が発生した。島根、鳥取の皆さまにおいても親族や知人で被災された方がおられるのではないかと思う。福島から避難してきたご家族もあると聞く。胸が張り裂けそうな思いで今も報道を見ている。言葉が見つからない。何と言っていいかわからない。

私自身、映画を作ることの意義や、作る過程において最善の注意力と想像力を持って事に当たらなければ取り返しのつかないことになると思ってやってきているつもりだった。だが、自然の猛威は我々に容赦なく襲い掛かり、〝現実〟を突き付けてきた。人間の想像や想定がいかに無力かと今更ながら思い知らされたのだ。

平和や安全は願っていたり、誰かの言うことを信じていたり、唱えているだけではもたらされない…。批判するばかりだったり、物事をやったことにしているだけだったら、後でそのツケが回ってくるのだとあらためて思う。

今回の災害に限ったことではない。戦争や環境破壊なども同様だ。自分のこととしていかに考え、普段から行動しないと、同じことの繰り返しになる。今回の震災は雄弁にそのことを物語っている。

そんな時、映画は一体何ができるのだろう…。永井隆先生の遺(のこ)した「己(おのれ)の如(ごと)く人を愛せよ」という言葉をふと思い出した。映画「うん、何?」の舞台、雲南市三刀屋町に永井隆先生の記念館がある。松江の生まれである永井先生のことは恥ずかしながら、撮影を機に詳しくなった。

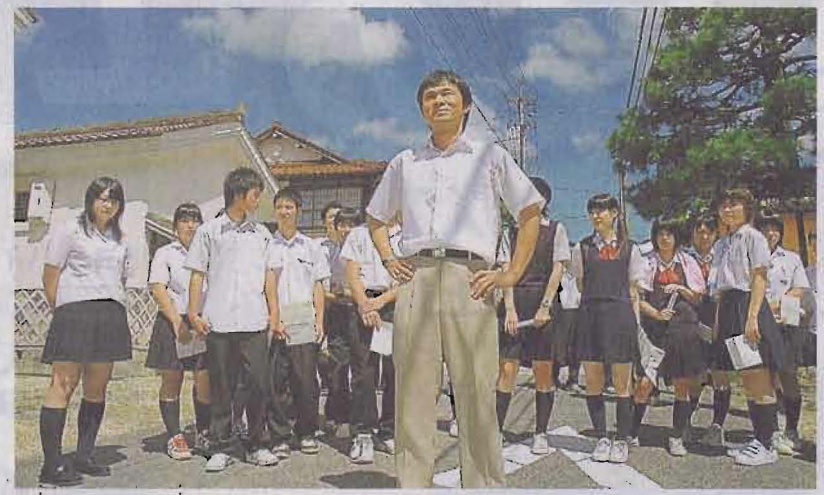
「長崎の鐘」で有名な先生は飯石郡飯石村(現雲南市三刀屋町)で幼少青年期をすごしたことは案外知られていない。長年の放射線研究による被ばくで白血病と診断され、余命3年の宣告を受けた後も病と闘いながら生涯患者と向き合った永井隆先生。平和を願い続けて逝った永井隆のメッセージを受け止めながら、その優しさは雲南の野山を駆けた幼少期に培われたのではないかと思いながら撮った作品だ。

自然や命があってこその映画だ。楽しいことや娯楽もいいが、そればかりだと想像力がなくなってしまう。今こそ一時の時流に流されない映画作りが急務だと思う。

最後にこの場をお借りして犠牲者のご冥福を心よりお祈りしたいと思う。

(錦織良成・映画監督)

=第2、4金曜掲載=



「おまえやちゃ、ふるさとの本当の良さをわかっちょーかや?」(映画「うん、何?」の一場面から)